

地域づくり表彰

真岡まちづくりプロジェクト（栃木県真岡市）

真岡まちづくりプロジェクト

私の未来は私がつくる

若者と大人による社会実験がまちのエネルギーに



1. 真岡市の概要

真岡市は栃木県の南東部に位置し、東に連なる八溝山地、西に流れる鬼怒川を抱える自然豊かな都市です。

市の面積は 167.34 平方キロメートル、人口 79,539 人。かつては農業を産業の基盤とするまちでしたが、現在は 94 社におよぶ企業が操業する大規模な工業団地を有するハイテク都市として発展を続けています。農業・商業・工業がバランスよく調和した理想的な地方都市です。

現在、図書館、子育て支援センター、地域交流センターからなる複合交流拠点の整備事業を進めており、関連して中心市街地の活性化を目指して、市民協働のまちづくりとなる、真岡まちづくりプロジェクト「まちをつくらう」（以下「まちつく」）を展開しています。



生産量日本一のいちご

2. 活動開始の背景・経緯

「まちつく」を開始するきっかけは、2019 年策定の「真岡市まち・ひと・しごと創生総合戦略」で、市内在住の高校生に行った居住意識のアンケートにおいて、平成 27 年から令和元年の 4 年間で「真岡市に将来も住みたい」が 55.0%から 35.6%に急低下してしまったことでした。

同様に 2019 年策定の「真岡市総合計画」で目指す、「真岡市に住みたい、働きたい、子育てしたいと希望を持ち、楽しさが実感できる都市（まち）の実現」と、実際に居住している高

校生の意識と乖離に、市では大きな危機感を持つこととなりました。

そこで新たに、若者が地域に関わり、まちづくりを「自分ごと」として考え、一人一人が住んで良かったと実感できるまちづくりを進めていくことが必要であると考えました。

文化財や一級河川の五行川など、真岡市の中心市街地にありながら、利用者が少なく、十分な利活用が図られていない場所を、「もったいない公共空間」として選定し、高校生や大学生、地域の大人たちによる、まちづくり実験を行い、まちに活力をもたらすことを目指して、令和 3 年 4 月、「まちつく」は始まりました。



利活用前の五行川河川緑地

3. 「実験すること」

「まちつく」初年度は、高校生以上 20 名を一般公募しました。募集にあたっては「公共空間を活かしながら、市民の手によるまちづくり実験を行ってみませんか」として、企画提案にとどまらずに、実際に社会実験までを行うとしたことが「まちつく」の特徴です。参加者が、企画・運営の過程から主体的、能動的にまちづくりに参画し、「実行」することを大切にしています。

社会実験は、12 箇所の「もったいない公共空間」から、五行川河川緑地や、県指定有形文化財の岡部記念館「金鈴荘」、市役所新庁舎の市民プラザ「青空ステーション」、二宮コミュニティセンター、真岡鐵道の無人駅である久下田駅など、フィールドワークを通して、メンバー自身が魅

力を感じた 5 箇所を活動の舞台として選び、アイデアを出し合いながら企画を練り上げ、実行しました。



自分の足でまちを巡る

そのうち五行川河川緑地は、殆ど利用されていない芝生広場でしたが、大学生からの、誰にも知られていないのはもったいない、たくさんの人に、この場所で「おしゃピク（おしゃれピクニック）」をしてもらいたい、ドッグランを作って犬と遊んでもらいたい、映えるモニュメントを作って写真を撮りたい、という提案を元に、学生が中心となってキッチンカー等の出店募集も行い、ピクニックマルシェとして約 2,400 人が来場する企画が実現しました。ステージでの催し物などが行われる従来型のイベントとは異なり、ピクニックマルシェでは、レジャーシートを持参した家族や友人、愛犬とドッグランを訪れた人々を中心に、川辺でくつろぎながら時間を過ごすという、これまでにはなかった空間を作ることができました。このピクニックマルシェを機に、河川緑地はその後、散歩で訪れる人が増え、中高生が放課後にサッカーや、おしゃべりをする光景が日常化することになりました。

また、文化財である金鈴荘は、文化芸術の発表の場として、市内の真岡女子高校の茶華道部による生け花や、琴部による演奏会を開催しました。感染リスクが比較的低い屋外の庭園を青空観客席として利用することで、建物と一体となる和の空間作

りにも成功しました。その結果、来場者アンケートでは、今後も文化活動の場として活動を継続してほしいとの回答が100%となり、第2回発表会にも繋がりました。

また、二宮コミュニティセンターでは、図書館のリサイクル本を活用した青空図書館を企画したことで、二宮図書館の利用者増にも結び付き、ドッグランでは盲導犬協会への募金を募ったところ、55,000円のご協力を得ることができました。その他、青空ステーションや久下田駅での取り組みも合わせて5箇所9回の社会実験によって、延べ5,600人の参加者を得ることができました。



五行川河川緑地のピクニックマルシェ

4. 活動の広がり

五行川河川緑地でのマルシェを皮切りに、多くの集客を得る成果を上げられたことで、「まちつく」の活動を見た市民から、協力の申し出や、自分たちでも新たに企画したいとの声が上がると、多くの方の賛同をいただきました。結果として、令和3年度の活動では、観光コンシェルジュや福祉団体、地元企業、市内高校、建設業協会をはじめとする58団体にご支援ご協力をいただくことができました。



アートで福祉団体とコラボ

2年目となる令和4年度は、学生に限定した20名の募集に対して、41名の応募をいただきました。募集案内で訪問した高校では、「地域貢献やまちづくりに関心のある学生は多いが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、直前に中止になる

ことがあり、学生のモチベーションが下がっている。そのような中で、「まちつく」はコロナ禍に始まり、感染対策を行いながら、積極的に活動していることで、生徒が安心して参加できる」との意見もいただきました。

「まちつく」では、元々目の前にあった地域資源の、特に屋外空間の効果的な利活用や、大規模なイベントの開催ではなく、近隣の方が、日常生活の延長で利用することを目的として活動してきたことで、コロナ禍でのニーズを満たした上でまちに賑わいを生み出すことができました。その点が評価されていると感じています。



令和4年度のまちつくメンバー

5. 継続するために

「まちつく」は、一過性のものに終わらないように、今後も継続していくことを強く意識しています。若者をまちづくりに巻き込む企画は、学生の進学、就職に伴って短期間の活動になりがちのため、2年目は改めて学生限定で募集を行い、1期生の学生メンバー5人は継続して、運営サポートとして関わることで、これからのまちづくりを担う人材の育成も担っています。また、地域の大人も同様に、一部の熱量ある人間が活動を続けるのではなく、地域の誰もがまちづくりに参加、協力できるような仕組みを作っていくことが必要と考えています。

また、自立した活動を行っていくには財源も重要です。補助金を活用するだけでなく、盲導犬協会への募金による社会貢献活動や、マルシェの出店料による収益を得ることも意識しています。

さらに、情報発信も重要です。活動への関わりを広げていくためには、活動過程を発信して、継続的な活動であることを知ってもらうこと、共

感してもらうことが重要です。

自分にも何かできるのではないかと、自分もやってみたい、と思えるには、活動しているメンバーの動機やまちづくりへの想いを伝えることが必要であるため、地域おこし協力隊によるインタビュー記事を作成し、WEBや市広報紙で発信しています。



真岡市長へ活動報告会と寄附

6. 展望

メンバーの大学生は「これまでの活動で初めて、自分でやっている実感を得られた。自分でアイデアを出すのが楽しいし、記憶に残る活動だった」、「活動をきっかけに、真岡市をもっと住みやすいまちにするにはどうすればいいか考えるようになった」と語っています。

「まちつく」の経験を通して、真岡市を知り、地域と何らかの関わりを持ちたいという人が増えることが、さらに地域への愛着を生み、まちづくりにつながっていくはずだと感じています。

若者の活動を見た、地域の大人からも、参加の要望があるなど「まちつく」がまちを動かす、新たな活力になりつつあるのを感じています。



一歩踏み出す

この取り組みは、一人の偉大なスターの100歩では継続していくことができません。そこに住む100人が、小さくても新たな一歩を踏み出すことで生み出される100歩が、真岡市がもっと住みたいまち、住んで良かったと思えるまちになると信じて、活動を続けていきます。